時評

# 『シネマ』と震災

奥田亡羊

ながらみ書房から石川信夫（信雄）の歌集『シネマ』が復刻された。『シネマ』の初版は昭和十一年。前川佐美雄の『植物祭』とならんで昭和初期のモダニズム短歌の代表的な歌集として知られている。復刻版『シネマ』のことは『短歌』九月号の書評でも取り上げたが、そこで論じきれなかったこともあるので、あらためてここで書いておきたい。

・壁にかけた鏡にうつるわが室（へや）に六年ほどは見とれてすぎぬ

石川信夫の作品は難解だ。どうして六年も自分の部屋に見とれていたのか、さっぱりわからない。石川は歌集の「エピロオグ」で、「詩人が、もっとも生き生きと想い浮かべた超現実的心象こそ、人類の表現なし得る最高のレアリテーである」と述べている。フランス象徴詩の影響だろう。もちろんそういう文学史的な文脈でこの歌を読み解くのも一つの方法だが、現代的な眼からこの歌を読み返して何となく感じるのは、関東大震災との関係である。

『シネマ』の収録歌は昭和五年（一九三〇）の秋から一年間でつくられたものであるという。とすれば、右の歌の「六年」は、震災の翌年、大正十三年（一九二四）から昭和五年にかけて「帝都復興事業」が進められた「六年」をさしているのではないか。鏡に映る「わが室」の虚ろさは、震災の記憶を消し去るかのように進められる復興そのものの虚ろさに通じるのかもしれない。

・白薔薇のをとめとわれはあを空にきえ去る苑の径の上なり

・あをい空のしたにまつしろい家建てるどんな花花の咲きめぐり出す

・窓のそとに木や空や屋根のほんとうにあることがふと恐ろしくなる

『シネマ』には空をうたった作品が多い。右にあげた歌の背後に震災で焼け野原になった風景や、都市が急ピッチで復興されて行く光景が見えないだろうか。とくに三首目の作品から感じるのはすべてが突然失われることを体験した者が持つ懐疑の眼である。「震災」をキーワードに『シネマ』を読み返してみると、歌がこれまでとはまったく別の表情で甦ってくる感じがする。

『シネマ』が背後に秘めているのは震災だけではない。次にあげる歌には日本がファシズムへと傾き、やがて日中戦争へと突入してゆく時代の不穏な空気が封印されている。

・てんてんとそこらあたりに散らばれる怖れほど赤き花束はなき

・あの日われ微笑みを見せぬ今もまたほほゑみてゆかば殺さるなら ん

・數百のパラシユウトにのつて野の空へ白い天使等がまひおりてくる

昭和初期と世相が似ていると言われる今日、石川信夫の歌が妙に生々しくわたしたちに迫ってこないだろうか。ひとたび完成された短歌を無理に現実と結びつけて解釈する必要はまったくない。わたしがここで確認したいのは、石川信夫にしても、のちの塚本邦雄にしても、詩が現実との緊張関係から生まれ、時代とともにその関係を結び直して甦り来るものであるということである。